

カブリモノのみんなぞく

Some study notes of head dress by ethnic & folkways

齊藤 基生
Motonari SAITO

はじめに

日本では、「みんなぞく」および「みんなぞくがく」という言葉に、「民族・民俗」および「民族学・民俗学」の二通りの漢字表記がある。そして両者の混同は、明治時代にそれらの学問が日本へ導入された当初から始まっている。その混乱を避けるために何か適切な別の表記法はないか模索されてきたが、結局21世紀の今日まで有効な対応策が見つからないまま時間だけが過ぎた。

さて話は変わって、帽子に代表される被り物について、室内での着帽の是非が取り沙汰されて久しい。しかし、なぜそれが問題になるのか、若者に限らず、理解できない人々が多い。

ここでは、民族と民俗の言葉の整理を試みつつ、合わせて室内での着帽について「みんなぞくがく」的に考察する。

1 「民族」の定義

民族とは何か、これを定義することは極めて困難である。浅井信雄はその著書『民族世界地図』の中で、次のように述べている。

「民族の研究者はそれぞれ、民族について独自の定義を持つ」といわれる。したがって、民族の数についても、五千という者、六千という者、いや一万以上だという者、さまざまである。みな勝手な定義にしたがつて、勝手な基準にもとづいて計算するからそうなる。「民族の定義」はないに等しく、存在するのは「民族の不定義」だけというべきである⁽¹⁾。

確かにその通りではあるが、これでは身も蓋も無いので、常套手段に従い、事典を引用する。梅棹忠夫監修、平凡社刊『世界民族問題事典』の「民族」

の項には、日本語における民族の用例に続き、以下のように書かれている。

民族を定義するのに、従来しばしば客観的基準と主観的基準の両面から検討すべきであるといわれてきた。客観的基準とは言語、宗教、生業、衣食住や対人関係の慣行などであり、主観的基準は〈われわれ意識〉である。共同の出自起源は、歴史的事実にかかわるとともに、神話・伝説にせよ意識が主要な役割を果たすので、両方の面にわたる事柄であるといえるだろう。しかしこの客観的な基準を用いても、例えば言語、宗教、生業、日常生活の基本的慣行のすべてが同じ範囲で重なりあい、同時に他の範囲の人々から区別されているような集団は、現実には存在しない。必ずそれらのどれかは、その集団の中でも一様には共有されていないか、逆に他の集団と重なるかしていることは、世界のどのような集団を例にとってみても明らかである。また主観的基準は、一つの時点をとっても常に同心円構造をもっており、また、他の集団との関係で状況的に変動するものである。

以下、共属感覚と共属意識、〈国民国家〉と民族、民族意識の形成と〈民族問題〉の本質、相互交渉の場としての〈地域〉への注目、と続く⁽²⁾。いずれにしろここでも「民族」を定義する困難さが示されている。

関 曠野はその著書『民族とは何か』の中で民族の研究史をはじめ、豊富な事例を紹介しながら、民族とは何かを論じている。その冒頭で、「民族」は現代政治におけるもっとも基本的かつ強力な観念だとし、結論部分で「民族とは、一民族の成員という資格において平等な、ないし平等であろうとする人々を意味している」としている。そして、「すなわち人間はみな、違っていると同時に、おおいに似たところのある存在なのである。この模倣の可能性が人間たちを民族にした。国家は体制 regime であり、民族とは絆 bond である」とまとめている⁽³⁾。

民族とは何かを論じたあまたの研究の中からはほんの3例だけを紹介したが、いずれにしろ万人が納得する「民族」の定義はないのが現状である。しかし、それでは議論が進まないのが、極めて漠然としているが、ここでは民族を「何らかの客観的基準や主観的基準によってまとめられた人々の集まり」とする。そして、それは生物学的基準でまとめられた人種とは異なる、文化的な基準によってまとめられた集団である。だからこそ、基準が変わることで同一人物が別の民族に属する可能性も出てくる。

2 「民俗」の定義

民俗とは何かを考える時、牧田 茂著『生活の古典—民俗學入門—』が手がかりを与えてくれる。その中で牧田は次のように述べている。

朝起きると顔を洗ったとか、食事は茶碗に何杯何を食べたとか、神棚に向かって何を祈ったなどというような、毎日毎日繰り返しているところの日常生活の極めて平凡なことについては、書き留めておくはざがないのです。日記をつけるにしても、変わったことだけを書いておくというのが、まずは普通のやり方であります。われわれの尋ねる民俗というものは、つまりは、このように平凡な日常茶飯のものなのです。

また、日本民俗學の研究方法についても次のように述べている。

名もなき民の日常生活のあとというものは、あまりにもありふれたことであつたがために、これを文字の上にたどることができないのです。それを文字以外の方法—今日われわれの現實の生活の中に、かすかに澱のように沈んで残っている“古いもの”を調べることによって、名もなき代々の祖たちの生活のあとをたどろうというのが、日本民俗學の行き方であります。

さらに、「民俗といい、民間傳承というものは、いつ誰が始めたとも分からずに、古くから民間に傳わっている習わしということであります。」⁽⁴⁾と説明している。

民俗とは何か、これまた多くの研究者が様々な見解を述べているが、ここでは牧田の著書に全面的に従い、「名もなき庶民のありふれた日常生活」としておく。つまり、事象であり、現象であり、人そのものではない。

3 「風俗」と「民俗」

民俗という言葉の理解を深めるため、よく似た言葉である風俗と比較することで明らかにしたい。両者の関係について、和歌森太郎が『日本風俗史考』の中で詳しく述べている。以下、要約しながら引用する。

「風俗」という言葉は中国の古典に由来し、上の施政教化がおのずからに「風」をなして、下の「俗」に影響し、その承け継ぐものとなる。上の支配者、指導者層が、あるすぐれた文化教養をまず形成し、これが漸次下層の民衆の生活態度に浸みていくのを前提に、ここに風俗になる。治者と非治者とのあいだにおいて、治者の風に非治者はの民がおのずからに倣い化して俗をなす。したがって、治者は自らの礼節作法をただしくせねばならぬと、絶えず言われていた。と中国古代の事例を紹介しつつ、和歌森は独自の「民俗」

「風俗」の見方を示している。

「民俗」は、地方民衆が政治や上からの教化活動とは無関係に、根っこから伝承してきた生活様式や態度、心情である。古典的な理解での「風俗」は、一見「民俗」に近そうで性格が違う。上流人からとか、支配者層からの影響感化、また索制におちいりやすいという点では、「風俗」がその性質を持つ。

そして研究対象は、民俗学で扱う民俗と風俗史で扱う風俗は、ひとしく生活文化の表現であるものの、民俗学では主にケ（日常）を扱い、風俗史ではハレ（非日常）を扱う、としている。

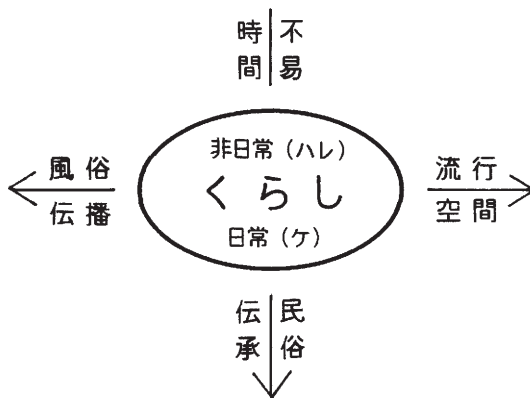


図1 風俗と民俗の関係

さらに、風俗は時代像を構成した中で意味を持ち、時代が変われば風俗の様態は変わる。風俗は一つの時代に横に伝播していくものであり、民俗は縦に伝承していく。三世代以上にわたって貫くと考えられるものが民俗である、と両者の性格の違いを示している。

また、民俗は歴史の文化的な進展を抑え、ブ

レーキをかける傾向がある。どの時代でもある保守と進歩の争いで、その保守面を民俗的なものが与え、風俗は絶えず新しい新鮮な変化を進め、風俗と民俗はそうに対抗したり、葛藤関係にある、と指摘する⁽⁵⁾。

つまり、風俗とは同一時代の、公家とか武家とか商家などの同一階層の暮らしであり、伝播性を持つ。それに対し民俗は、時代を貫く伝承性をもつ。また、風俗が主に都市部の現象であるのに対し、民俗は田舎に多く見られる。そして、風俗は時代性が、民俗は地域性が顕著だが、共に「生活文化の表現」であるだけに、両者は互いに影響しあっている（図1）。

4 「民族学」と「民俗学」

民族とは先に述べたように「何らかの客観的基準や主観的基準によってまとめられた人々の集まり」であり、民俗とは「名もなき市井の人々の暮らしそのもの」である。ではそれらに「学」の文字が付け加わったらどうなるか。

民族学も民俗学も、ともに衣食住をはじめ、庶民の日常、非日常の暮らしに関わる有形無形のすべてが研究対象となる学問である。これまでもそれぞれの学問に対する様々な定義が試みられているが、ここでは研究者と研究対象との関係から両者を区分する。つまり、ある研究者が自らの属している集団の暮らしを研究対象にすればそれは「民俗学」であり、自分の属していない集団の暮らしを研究対象にすればそれは「民族学」となる。

この時、何をもって自ら「属する、属しない」を決めるか。この点に拘りだすと、先の民族の不定義同様、泥沼にはまる可能性が高い。ここでは、これまた人により様々な考えがあろうが、「われわれ意識」の有無で判断したい。つまり、研究対象に属していると自覚しているか否か、本人次第である。

5 被り物の「民族学」

1) 帽子の歴史

田中千代著『服飾事典』によれば、帽子（被りもの）の起源は「古代ギリシャ時代のクラウン（crown = 帽子の山）が低く、ブリム（brim = つば）の広いペタソス（petasos）と呼ばれる帽子が最初と思われる。しかしそれらの帽子は、防暑、防寒、防砂、または戦闘防ぎよ用として頭を保護する目的、その他階級の象徴であったが、文化の発展にともなって装飾の役目をかねるようになってきた。」⁽⁶⁾と簡潔にまとめられている。

また『帽子の知識』によれば、「帽子の歴史は非常に古く、戦闘用の武器としての流れ、熱帯地や寒冷地に被る頭部の防暑、防寒等の用途、階級、権威、職業を示す象徴としての被りものとして、外出又は、労働等の際の着用物として、同一の団体、或はグループの一員であることを示す為として、舞楽その他の衣装の一部として、または装飾的な意味を持つ被り物として等々あって、夫々に歴史の流れを持っている。」⁽⁷⁾

いずれにしろ、被り物（帽子）の起源は頭部の物理的な保護から始まり、その後それに象徴性や社会的な意味が加わる。そして現在では、おそらく帽子の誕生以来含まれていたであろう、装飾の要素がより多くなり、身体を飾る小道具の一つとしての側面が強くなってきた。その結果、室内における着帽をめぐる問題が生ずるようになってきたが、それは被り物本来の役割や歴史が忘れられかけていることに遠因がある。

2) アフリカの若者の帽子

井関和代は「無冠者の帽子」と題し、帽子流行の伝播に関する興味深い話

を紹介している⁽⁸⁾。そこでは、最近「帽子」をかぶったまま飲食する若者が増えてきた背景を、民族学的に考察している。以下概要を紹介する。

井関によれば、日本の若者が帽子を被ったまま飲食するのはアメリカのアフリカ系ミュージシャンの影響であり、その彼らに影響を与えた先をたどると、彼らの母国であるアフリカからアメリカに出稼ぎに来た若者の古着ファッションに行き着く。1980年代、西アフリカの若者の間で皮ジャンパーやジーンズなどのアメリカ衣料の古着ファッションが流行りはじめる。なかでも、色鮮やかな毛糸のスキー帽は、この地域の季節風が起こす砂嵐の砂除けとして始まり、女性用のウィッグに対抗するように無冠の若者たちの間で広まっていった。その古着ファッションが出稼ぎ先のアメリカまで持ち込まれ、アメリカのミュージシャンの間で受け入れられアメリカナイズされたスタイルとなり、さらにそれが休暇でアフリカに帰省する若者たちの最新ファッションとして、ボロ着で故郷に「錦」を飾る。

古着がアメリカとアフリカの間を行き来する間にファッションとして洗練され、めぐりめぐって日本の若者にも受け入れられるようになってきた。

さらに井関は、カメルーン北西部にある神聖王国バツツの帽子に関する民族事例を紹介している。それによれば、宮廷に功績のあった者に、神聖王が手ずから伝統衣装を与える。それはラフィアヤシ製の手提げ袋と帽子であり、裸形であった頃に帽子の様々な形態や「翳しもの」が王国での階級を示した。

集会の場で伝統帽をかぶっていない者は王国の構成員でないことを意味し、発言権すら与えられない。いっぽう、祖先祭祀をおこなう場や宮殿では、どのような高位者であっても脱帽しなければならない。宮殿内で帽子をかぶっているのは頭頂部に神を宿すとされる神聖王のみである。

以上、ここでは物理的な身体保護を越えた、帽子の持つ社会的な意味が明確に示されている。

3) カンボジアの事例

筆者は、2006年3月から、毎年3月と8月にカンボジア南部の遺跡調査に参加している。そのカンボジアは仏教を国教とし、国民の大多数は仏教徒である。そして、調査団は遺跡への出入りや昼休みなどに、地元の仏教寺院の境内を借用してきた。

2007年夏、いつものようにその境内を利用している時、一緒に調査に参加しているカンボジア側の学生が、「村人から、境内では帽子を被らないように

注意を受けた」と言ってきた。調査に利用し始めてから足掛け3年を過ぎて、初めての指摘だった。

遺跡のある辺りは北緯10度程と低緯度で、一年を通し日の出は午前6時、日の入りは午後6時前後である。太陽はほぼ真東から昇り、日中真上を通りほぼ真西に沈む。3月は乾季、8月は雨期の真ただ中だが、いずれも日中の日差しは厳しく、屋外ではつばの広い帽子なしでは耐えられない。

もちろん境内での休息時、木陰や東屋風の建物の中では帽子を取っていたが、日差しのある所では何のためらいもなく帽子を被っていた。そこへ先の指摘である。よくよく話を聞けば、お寺は神聖な場所であり、剃髪している僧侶は当然無帽である。信仰の厚い村人からすれば、敬愛すべき無帽の僧侶の前で自分たちが帽子を被っていることは許されない。

また、我々がお寺から調査地点に向かう農道で地元の人とすれ違う際、帽子を取り胸の前で両手を合わせて挨拶をすれば、言葉は全く通じなくても硬い表情がまさに破顔一笑、にっこりと微笑み返してくれる。

敬虔な仏教国であるカンボジアにおいて、着帽の有無は極めて重要な社会的意味を持っている。村人は、おそらく調査に入った3年前から境内での着帽が気になっていたに違いない。しかし、外国から来た調査団であり、おそらくよそ者として大目に見ていたのではなかろうか。ところが、その後も毎年3月と8月に定期的に來ることが定着し、我慢の限界を越し注意に至ったものと思われる。それは我々の行動を非難したものではなく、調査を地元の人が受け入れ、我々も地元の一員として認めてくれたからこそ地元の約束事を教えてくれたに違いない。そこに至るまでに3年かかったということであり、有り難いことである。

ところで、写真に写っているのは、牛耕用の大きな鋤を担いで境内を通り抜ける地元農民である。厳しい日差しの下、彼は帽子を被らず左手に持ち、ごく自然な姿で歩いて行った。

さて、カンボジアの文化規範として、人前で肌を露出することは良しと



写真 脱帽して境内を通る人（2008.8.17撮影）

されず、特に目上の人の前でのTシャツ、短パン、サンダル履きのご法度である。着帽についても、こうした基準で考える必要がある。なお、肌の過度の露出を避けるのは、強い日差しや怪我から身を守る実利的な意味もある。

6 被り物の「民俗学」

1) 日本における被り物の歴史

日本列島においても、ヒトが登場した当初から、何らかの被り物があったはずである。しかし、おそらくそれらの大部分は有機質の素材で作られており、分解して直接考古資料として出土することはない。縄文時代の土偶を見ても、髷のような表現はあっても被り物を示す事例を寡聞にして知らない。

しかし、古墳時代になると人物埴輪の頭部には被り物を伺わせる造形がある。特に男子の武人は兜を被ることが多い(図2)。

塩谷壽助『日本服飾考』の冠物の項では、冠、烏帽子、頭巾、笠、傘、帽子について、それぞれの歴史が詳しく述べられている。詳細は原典⁹⁾に譲り、ここでは大きな流れだけ見る。

推古朝に位階が制定され、冠は色により位の高下が区別された。以後形や文様、素材等、様々に変化しながら一部現代まで連綿と続いている。烏帽子は公家の略装として始まり、鎌倉時代には武家や



図2 武人埴輪(千葉県殿部田1号墳)

民間も被るようになった。冠や烏帽子が公家を中心に、身分や地位を表すのに対し、笠は古くから庶民の間で広く物理的な頭部保護の実用品として使われてきた。素材や編み方によって様々な種類がある。傘については省略する。もう一つ庶民の被り物として頭巾がある。古くは山伏の兜巾に始まり、布で頭を包んでいたが、そのうち頬を隠すように顔全体を包み込む形も現れてくる。身分や職種により、これまた様々な種類がある。

帽子と言えば、一般的には明治時代以降の洋装の一つとして思い浮かぶが、古代以来の女性の被りものに、帽子と呼ばれたものがある。昔の女性は

髪に油をつけなかったため髪が散りやすく、それを防ぐために頭を包むのを常とした。中世の歌に綿帽子の文字が見られ、江戸では「てぼそ」、堺では「こきん綿」などと呼ばれていた。婚礼の時花嫁が被った「角かくし」も綿帽子の一種とされている。

明治時代になると、いわゆる洋装の帽子が登場する。それにともない、女性の旧来の帽子は姿を消す。一方、男性は断髪とともに帽子が用いられ、着物の時も被るようになる。男性用帽子が日本で製造されるようになったのは、明治6年頃からとされている。

2) 帽子の禁忌

室内で帽子を被ることの禁忌について、井関は次のように述べている。

帽子をわが国古来の庶民のカプリモノに置き換えると「笠」となる。八世紀に編纂された『日本書紀』巻一の素戔鳴尊の「青草の笠簀姿」や、折口信夫の「まれびと論」、東アジアの「簀笠論」を引くまでもなく、笠に対する作法は、長く日本の衣文化の根底にひき継がれ、明治以降になって、笠が帽子に、簀がコートにと西欧化していく中でも、これらを着けたままで他人の家内に入ることは禁忌とされてきたのである⁽¹⁰⁾。

つまり、明治時代になり洋装が徐々に広がる中、形は違えど同じ頭の上に載せるものとして、江戸時代以前の被り物の精神性が洋装の帽子にも引き継がれた。古代以来江戸時代まで、冠や烏帽子は身分や位を表すのもであり、笠や頭巾はあくまでも屋外で被るもので、外出着や野良着の一部であった。その象徴性や実用性が、洋装の帽子にそのまま当てはめられた結果、一般庶民が室内で帽子を被ることを良しとしなかったのである。秋田のナマハゲが簀笠を着けたまま他人の家に入れるのは、面を付けた彼らは普通の人ではなく、マレビトだからである。

3) 学生アンケート

筆者は、2002年から本学（名古屋学芸大学）一般教養科目の「民族と文化」を担当している。民族や文化に関する概説を講義する中で、衣の民族学についても触れる。その時学生に興味関心を持ってもらうため、2004年より室内における着帽について「何か一言」聞いている。着帽の是非を問うのではなく、あくまでも本人の思うところを書いてもらう。その結果、是非を含め、様々な回答が得られる。それをこちらの判断で適宜、肯定、条件付肯定、中立、条件付否定、否定、その他を、年度別、男女別にグラフ化した（図3）。

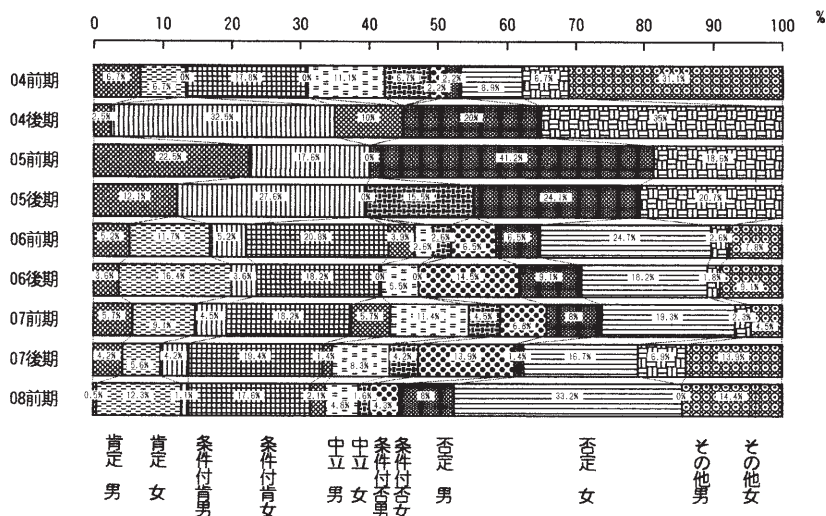


図3 室内での着帽に対する見解

条件付の肯定と否定は、やや恣意的な分類になっていることは認めざるを得ない。また、年度により分類基準にぶれがあることも事実である。

それはさておき、過去5年間9期分の集計結果を概観する。年度別見ると、肯定は1～2割、条件付肯定を加えれば3～4割が室内での着帽を容認している。一方、否定は1～4割、条件付否定を加えてもそれに若干上乗せする程度になる。肯定派より否定派が1割程度多いだけである。年度別で増減の差が著しいのは、中立と賛否に無関係なその他で、中立は1～2割弱、その他が1～4割ある。賛否等の割合は時間経過と無関係に増減しており、時間以外のどんな要素が影響しているか、今のところ不明である。なお、それぞれの意見における男女比についても、有為な差は認められなかった。

肯定する代表意見は、「ファッション」性である。帽子もファッションであり、ファッションは自由だ、オシャレなんだからいい、というものである。

条件付肯定では、ファッション性を容認しつつ、場の公共性、相手との社会的位置関係、周りの目、といったことに配慮するよう求めている。

中立としたものは、本人の判断に任せるという自主性尊重と、他人がどうふるまおうと意に介さない放任の、二つの考え方を含んでいる。

条件付否定もその意見は条件付肯定と似たり寄ったりだが、より否定的な見方をこちらに分類した。

否定派の意見は、論外、失礼、マナー違反、昔から決まっている等々、厳しいものが多い。理屈拔きのところがあり、特に教室内の着帽は許されない。

こうして全体を眺めてみると、時と場所をわきまえる、という常識的な意見が肯定派否定派双方から出されおり、極めて健全な判断と言える。

なお、受講生の中にはファッション造形学科の学生もいる。肯定派が多いかと思いきや、否定派が多かった。TPOをわきまえられない人にファッション云々を言う資格はない、という意見は同科の学生だけに説得力があった。

また、室内での着帽に関し、工場内での安全帽や防塵帽、食品関係の仕事場での帽子に触れる例があったが、これは工作上必要不可欠なものであり、ファッションとしての帽子と同列に論議すべき対象ではない。

ところで、興味深い事例は「室内で帽子を被ると禿げる」と幼い頃に言われていた学生が、いつも一定数いることである。正直、21世紀になってもまだこうした物言いが残っているとは意外であった。室内での着帽と禿げることには、生理学的に直接因果関係はない。遺伝や生活習慣に関わることで、全くの俗説である。これは、室内で着帽することが無作法であり、その戒めとして持ちだされているに過ぎない。この一言で迷惑を被っている男性諸氏は多いと思われるが、いまだに躰として一定の抑止力を持ち続けているのは注目値する。これなどは、不可解な禁忌の生まれる一つの事例である。

7 まとめ

室内において着帽が許されるのは、民族事例でも民俗事例でも、一般庶民ではない王やマレビトなどの特別な人々だけである。つまり、室内で被り物を頂くことで、その人が特別な人であることを象徴している。さらに、被り物は形や色を変えることで、社会や集団における階位や職業も表す。

被り物は、自他や序列を判断する基準となる。これが理屈抜きで、伝統として人々の意識の中に共有されてきた。そして、長い年月を経る過程で、頭部の保護という本来の役割から、象徴としての意味が強くなってきた。

その一方、現代では、若者に限らず、帽子はファッションの一部となり、それが室内での着帽につながる。帽子に象徴としての意味が共有されていれば、着帽の有無は体制への恭順や反体制の姿勢を表す。ところが、着帽が本来の役割どころか象徴としての意味も失い単なるファッションと化した時、その見てくれとは逆に中身は軽くなるばかりである。60・70年代の学園紛争時、学内外を席卷していたあの多様なヘルメットとは比べるべくもない。

おわりに

被り物を手がかりに、「民族・民俗」、「民族学・民俗学」の言葉を整理し、室内での着帽について「みんぞくがく」的に考察してきた。このことに限らず、日常生活における禁忌の多くは、今となっては理由が見いだせないことが多々ある。それどころか、理不尽なことさえある。どれも当初はちゃんとした意味があったはずだが、長い年月を経る間に本来の約束事が見失われてしまった。その源泉を明らかにするのは、民族・民俗学の喜びである。

ただ、当たり前のことはあまりに当たり前として記録されることが少なく、研究の手がかりが残りにくい。だからこそ、今当たり前のこととして見過ごされている事柄を克明に記録する作業は、名もなき人々の歴史や文化を正しく伝えるために重要であり、民族・民俗学の責務である。歴史や文化は支配者、治者、選民だけのものではないことを忘れてはならない。

注

- 1 浅野信雄『民族世界地図』新潮社、東京、1993年、pp5・6。
- 2 梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』平凡社、東京、1995年、pp1116・1167。
- 3 関 曠野『民族とは何か』講談社現代新書1579、講談社、東京、2001年、p14、p225
- 4 牧田茂『生活の古典—民俗學入門—』角川新書20、角川書店、東京、1952年、pp15-17。
- 5 和歌森太郎『日本風俗思考』潮新書60、潮出版社、東京、1971年、pp3・4、pp12-25。
- 6 田中千代『田中千代服飾事典』新增補第1刷、同文書院、東京、1981年、p771。
- 7 東京帽子製造協同組合編『帽子の知識』、東京帽子製造協同組合、東京、1987年、p9。
- 8 井関和代「無冠者の帽子」『月刊みんぱく』第27巻第10号、国立民族学博物館、大阪、2003年、pp10-12
- 9 塩谷壽助「冠物」『日本服飾考』、金園社、東京、1979年、pp205-216。
- 10 前掲注8に同じ、p10。

挿図出典

図2 大塚初重・小林三郎編『古墳辞典』、東京堂出版、東京、1982年、p-436、転載。